

## 2 高山市朝日町地域の民話

朝日町では、秋神地区から流れる秋神川と、青屋地区から流れる青屋川が合流する。秋神川が合流する地点はダム湖になっている。かつてあった集落に関する話として「蜘蛛だ淵」の話が伝えられている。また、青屋川と合流する手前、朝日町浅井にある「龍宮淵」の名は『飛州志』にも記述されている。

### (2-1) 蜘蛛だ淵

#### ①話の内容

今は、ダムになっちまっとるけど、「蜘蛛だ淵」っていう淵があつて、青々とした淵があつたの。その昔、「歩荷（ボッカ）」って、荷を背負って歩く「歩荷」な。それからあの、荷杖（ニヅエ）ってものがあつた。立って支って、「ああ、エライエライ」って休んだ。

その荷杖を支っておつたらね、蜘蛛の糸が淵から伸びてきた。それでその荷杖に糸かけて川へ引き、糸かけて川へ引きしたの。こりゃあ変だなあと思って、その人は木の株に糸をかけておいてな、ほいで、離れて見とつた。ほいたらその、木の株がギャーッと引っこまれていった。蛇が大蜘蛛に化けて、歩荷を淵に引き込もうとしたらしい。

（『飛驒の民話・唄・遊び』ほか）

#### ②取材調査

秋神川沿いに「小瀬ヶ洞」という集落があり、その中に「蜘蛛だ淵」があつたが、現在は秋神ダムに沈んでいる。秋神ダムの管理所には同じ小瀬ヶ洞集落の話である「蒲田の力持ち石」が飾られていた。この石は、力持ちの男がある朝、秋神川へ洗面に行つて持ち帰ったもので、男の足跡や一文銭をひねり込んだ跡が残っていると伝えられる石である。昭和 31 年発行の『朝日村史』にはこの石が湖底に沈んでいると記されているが、その後、昭和 61 年に引き上げられた。現在、集落や淵の姿を見ることはできないが、現在に残された民話から当時をしのんだ。



秋神ダム（7月20日高山市朝日町）



鎌田の力持石（7月20日）

#### ③研究・考察

話に出てくる「歩荷（ボッカ）」とは、生活用具や食料品など、荷物の輸送を行う仕事をしてきた人のことである。また、『朝日村史』によると、蜘蛛だ淵は「久母田（クモダ）淵」であり、この淵のヌシが蜘蛛であったことから、そうよばれたそうである。なお、『朝日村史』の物語に登場する人物は歩荷ではなく、釣人となっている。

## (2-2) 龍宮淵

### ①話の内容

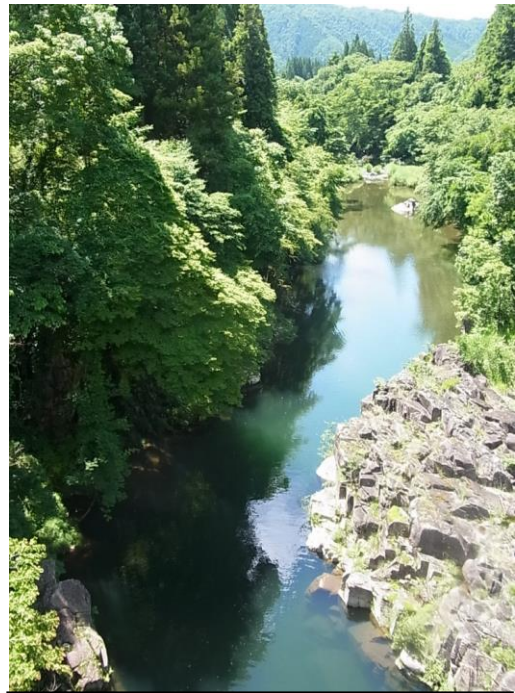
龍宮橋は、はじめ「念仏橋」と呼ばれたが、昭和 43 年に川の水が氾濫して橋が流れ、御岳橋として改められた。その後、国道 361 号線ができるとともに、平成 6 年 8 月に新しく橋を作り「龍宮橋」と改めた。

龍宮橋の名前の由来は、乙姫様が馬に乗って「龍宮淵」に入ったという言い伝えからきている。「龍宮淵」は、昔、水が豊かで、川がありながらそこが見えないくらい深い淵であった。「龍宮橋」は「龍宮淵」のうえに架かっている。

(『飛驒の民話・唄・遊び』)

### ②取材調査

地元の方に聞くとすぐ教えてもらえるくらい有名な話で、龍宮橋には浦島太郎などのデザインがされていて、一目でわかる橋だった。龍宮橋から見える龍宮淵は、川の上流域とは思えないほど、とても深い淵だった。高根町から朝日の浅井地区に抜ける地域にこの淵があり、龍宮橋がなければ通り抜けられないことがわかる。特徴的な地形であるため、昔からの言い伝えが残っているのだろう。



龍宮淵 (7月27日高山市朝日町)



浦島太郎がデザインされた龍宮橋 (左) から龍宮淵を見る (右) (7月27日)

### ③研究・考察

龍宮に関する物語はこの他にも各地に伝わっている。後述する馬瀬の民話「八百比丘尼」は、酒屋の主人が、湯が淵の底にある龍宮から不思議な箱を持ち帰る…という話である。また、門和佐地域の民話「龍宮が淵」は、深い淵の底から乙姫の機織りの音が聞こえるが、ある人が馬鍬を投げ入れてからは、その音が絶えてしまったという話である。朝日の小瀬が洞にあるセバ岩という所にある淵に鋸くずを投げ込むと小坂の長谷寺下の淵に浮かび上がるという話もある。深い淵は龍宮をイメージしやすいため、考え出されたのだと考える。